

# サルデーニャ語におけるカスティーリャ語からの借用語について\*

## — 借用時期の相対的年代 —

### La cronologia relativa dei prestiti dal castigliano al sardo

金澤 雄介

KANAZAWA Yusuke

#### 1 はじめに

##### 1.1 導入および背景

15 - 18 世紀における、スペイン王国のサルデーニャ島支配にともなうカスティーリャ語の流入によって、多くのカスティーリャ語の語彙がサルデーニャ語 (sard.)<sup>1</sup> に借用された<sup>2</sup>。これらの借用語は現在もおサルデーニャ語に生き続けており、現代サルデーニャ語の語彙体系に不可欠な要素となっている。借用語の種類としては、キリスト教、政治、衣、食、住、植物、海産物関係のものが多く見られる。本発表の目的は、これらの語彙の借用時期の相対的年代を決定することである。

借用時期の相対的年代を決定するための手段として、古カスティーリャ語 (cas.ant.) から現代カスティーリャ語 (cas.mod.) にいたる過程で生じた子音変化を用いる (2. 2. 3 参照)。すなわち、変化をこうむる前の子音と、変化をこうむった後の子音がサルデーニャ語でどのように借入されているかを観察することによって、より古い時代に借用された語彙とより新しい時代に借用された語彙を分類することが可能となる。

##### 1.2 先行研究

サルデーニャ語におけるカスティーリャ語からの借用語に関する研究は、カスティーリャ語、サルデーニャ語それぞれの語形と、その語彙のイタリア語訳が呈示されているだけのものが多くを占める (Blasco Ferrer (1984), Wagner (1997) など)。借用時期の相対的年代についての研究は、Wagner (1922), (1984), Virdis (1978) に見られるが、その内容は極めて断片的なもので、包括的な記述にはいたっていない。従って、ここでそれらの研究を詳しく述べることはせず、3章における本稿の考察と合わせて取り上げる。

### 1.3 借用語のデータについて

本稿で用いる借用語のデータは、Wagner (1960-1964) から収集した語彙である。この辞書では、その語彙が借用語である場合、カスティーリャ語の語形が併記されている。また、古カスティーリャ語の語形については、Corominas / Pascual (1980-1991) を参照した。

## 2 考察のための準備

本章では、本稿で行う考察のための前提となる諸要素を導入する。まず、サルデーニャ語とカスティーリャ語の音素体系を示す。次に、カスティーリャ語の子音の借入方法に関して重要な意味を持つと考えられる、サルデーニャ語における音韻的特徴について示す。さらに、サルデーニャ語におけるカスティーリャ語からの借用語の相対的年代を決定するための判断基準となり得る、古カスティーリャ語から現代カスティーリャ語への移行の過程における通時的子音変化について述べる。

### 2.1 サルデーニャ語

#### 2.1.1 ログドーロ方言の音素

ログドーロ方言の音素は、以下のとおりである (Corda 1994: 133, 135 を要約)。

/p, b, t, d, k, g, d̪, f, v, s, ʃ, j, ts, dz, tʃ, dʒ, m, n, ɲ, r, l, ʎ, a, e, i, o, u/

#### 2.1.2 カンピダーノ方言の音素

カンピダーノ方言の音素は、以下のとおりである (Viridis 1978: 26, 84-98 を要約)。

/p, b, t, d, k, g, d̪, f, v, s, ʃ, ʒ, j, ts, tʃ, dʒ, m, n, ɲ, r, l, ʎ, a, e, e, i, o, o, u/

#### 2.1.3 サルデーニャ語における音韻的特徴

サルデーニャ語には、/z/ は音素として存在しないが、母音間の /s/ は有声化して [z] で実現される (Blasco Ferrer 1984: 35)。以下にいくつか例を挙げる。

log. sale, camp. sali 「塩」

log./camp. kazu 「チーズ」

log./camp. tasseddu 「少量」

log./camp. arroza 「ばら」

log. istaḏe, camp. staḏi 「夏」

log. pezare, camp. pezaì 「重さを量る」

サルデーニャ語におけるこのような音韻的特徴は、借用語にも同じように適用される。

## 2.2 カスティーリャ語

### 2.2.1 古カスティーリャ語の音素

古カスティーリャ語の音素は、以下のとおりである (Penny 2002: 54, 96 を要約)。

/p, b, t, d, k, g, f, β, s, z, ʃ, ʒ, j, ts, dz, tʃ, m, n, ɲ, r, r̄, l, ʎ, a, e, i, o, u/

### 2.2.2 現代カスティーリャ語の音素

現代カスティーリャ語の音素は、以下のとおりである (Green: 81, 85 を要約)。

/p, b, t, d, k, g, f, θ, s, j, x, tʃ, m, n, ɲ, r, r̄, l, ʎ, a, e, i, o, u/

### 2.2.3 カスティーリャ語内部で生じた子音変化

本稿では、借用時期の相対的年代を決定する手段として、カスティーリャ語内部で生じた次のような子音変化を用いる。古カスティーリャ語では /ts/ <ç> と /dz/ <z> は別個の子音であったが、現代カスティーリャ語ではこれらの子音は /θ/ <c/z> に合流した； cas.ant. /ots/, /odz/ > cas.mod. /oθ/ 「円形鎌」、/oθ/ 「峡谷」。以下にいくつか例を挙げる<sup>3</sup>。

cas.ant.	cas.mod.		cas.ant.	cas.mod.	
adereçar	aderezar	「装飾する」	abogazía	abogacía	「弁護士業」
cañelo	cancel	「防風ドア」	rezelar	recelar	「疑う」
çimitarra	cimitarra	「新月刀」	tapiz	tapiz	「つづれ織り」

次章では、この子音変化を用いて、実際にサルデーニャ語におけるカスティーリャ語からの借用語の相対的年代を決定することを試みる。

## 3 考察

本章ではまず、カスティーリャ語の子音がどのような変化をともなってサルデーニャ語に借入されるか、ということについて考察する。これらの子音の借入方法を明らかにした後、借用時期の相対的年代を決定する。

### 3.1 cas.ant. ts の借入方法

ログドローロ方言、カンピダーノ方言ともに /ts/ は存在するので、cas.ant. [ts] <ç> はそのまま [ts] で借入されたと考えられる<sup>4, 5</sup>。

(I)

log. agratsu = cas.ant. agraç (mod. agraz) 「未熟なぶどう」

log. tsittu = cas.ant. çita (mod. cita) 「召喚」

camp. kantselu = cas.ant. cançelo (mod. cancel) 「教会表玄関の木製の扉」

camp. frantseziġa = cas.ant. françesilla (mod. francesilla) 「アネモネ」

log./camp. atsottu = cas.ant. açote (mod. azote) 「鞭」

log./camp. lantsa = cas.ant. lança (mod. lanza) 「槍」

log. galantsette, camp. galantsettu = cas.ant. galaçete (mod. galancete) 「しゃれた男」

### 3.2 cas.ant. dz の借入方法

サルデーニャ語には、音素 /z/ は存在しないが、母音間の /s/ は有声化して [z] で実現される (2.1.3 参照)。従って、cas.ant. [dz] <z> は母音間において [z] で借入されたと考えられる。また、カンピダーノ方言において語末に母音が添加されている形式が見られるが、このような場合も母音間という扱いを受け、[z] で借入されていることがわかる<sup>6</sup>。

(II)

log. appaziguere = cas.ant. apaziguar (mod. apaciguar) 「痛みを鎮める」

log. gozare = cas.ant. gozar (mod. gozar) 「享受する」

camp. albazea = cas.ant. albazea (mod. albacea) 「後見人」

camp.arrozu = cas.ant. arroz (mod. arroz) 「米」

camp. monaziġu = cas.ant. monazillo (mod. monacillo) 「侍者」

### 3.3 cas.mod. θ の借入方法

ログドローロ方言、カンピダーノ方言ともに /θ/ は存在しない。従って、cas.mod. [θ] <c/z> は [s] で借入されたと考えられる。ただし、この借入方法は母音間以外で観察される。

(III)

log. alkansare = cas.mod. alcanzar (ant. alcançar) 「獲得する」

camp. alaβansa = cas.mod. alavanza (ant. alabanza) 「聖人の賛美」

log./camp. meskla = cas.mod. mezcla (ant. meçcla) 「調合」

一方、母音間では重子音 [ss] で借入されたと考えられる。サルデーニャ語における母音間の /s/ は有声化して [z] で実現される。サルデーニャ語におけるこのような音韻的特徴を考慮すると、母音間において重子音 [ss] で借入されるという現象は、母音間における /s/ の有声化を防ぐため、すなわち cas.mod. [θ] の非有声性を保持しようとしたためであると考えられる。

(IV)

log. assussena = cas.mod. azucena (ant. açuçena) 「白百合」

log. nessju = cas.mod. necio (ant. neçio) 「無能な」

camp. aßestrussu = cas.mod. avestruz (ant. avestruz) 「だちょう」

camp. bussoni = cas.mod. buzón (ant. buzón) 「栓」

log./camp. brossa = cas.mod. broza (ant. broça) log. 「ブラシ」、camp. 「壁から剥げ落ちた石灰」

log./camp. tapissu = cas.mod. tapiz (ant. tapiz) 「つづれ織り」

### 3.4 先行研究との比較

ここまで、cas.ant. [ts], [dz] と cas.mod. [θ] がサルデーニャ語においてどのように借入されているか、ということについて示した。本節では、先行研究におけるこの問題に対する考察について触れる。

Wagner (1984: 420) は、cas.mod. [θ] がサルデーニャ語においてどのように借入されているか、ということについて述べている。その記述には、

“In alcune parole le cons. spagn. scritte con z, c compaiono come ts, c'; sembra che queste voci appartengono ad uno strato più recente di prestiti, e che si siano diffuse in un periodo nel quale il suono in questione veniva già pronunciato come fricativa interdentale (θ), analogamente a quanto avviene nello spagnolo moderno.”

と述べ、この説明に該当する例として以下のような語彙を挙げている（本稿の表記法に改めて示す。また、原典では古カスティーリャ語の形式は挙げられていないが、ここでは参考のために併記しておく。）。

(V)

camp. ađeretsai = cas.mod. aderezar (ant. adereçar) 「繕う」

log./camp. albritsjas = cas.mod. albricias (ant. albricias) 「クリスマスプレゼント」

log./camp. alguatsile = cas.mod. alguacil (ant. alguaçil) 「守衛」

log./camp. atsottu = cas.mod. azote (ant. açote) 「鞭」

また, Wagner (1922: 255, 256), (1984: 418-419) は次のような例も挙げている。これらの借用語によって, cas.ant. [ts], [dz] はサルデーニャ語においてそれぞれ [ss], [z] で借入される, ということを示している。cas.ant. [ts] の借入方法については, 母音間の例, すなわち [ss] で借入される例しか挙げられていない (本稿の表記法に改めて示す。また, 原典では古カスティール語の形式は挙げられていないが, ここでは本稿の例示方法に合わせて示しておく.)。

(VI)

log. kođissja = cas.ant. codiçia (mod. codicia) 「熱望」

camp. destrossai = cas.ant. destroçar (mod. destrozar) 「粉々に砕く」

camp. peđassu = cas.ant. pedaço (mod. pedazo) 「断片」

log./camp. assussena = cas.ant. açuçena (mod. azucena) 「白百合」

(VII)

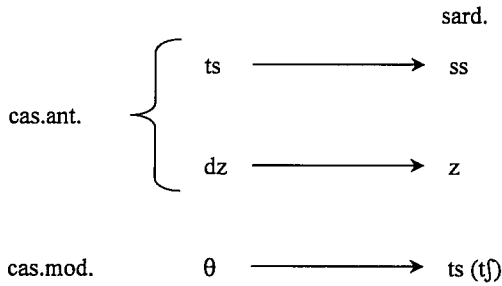
camp. arkuza = cas.ant. alcuza (mod. alcuza) 「油入れ」

camp. bazjai = cas.ant. baziar (mod. baciari) 「空にする」

log./camp. azulu = cas.ant. azul (mod. azul) 「青」

log. gozare, camp. gozai = cas.ant. gozar (mod. gozar) 「享受する」

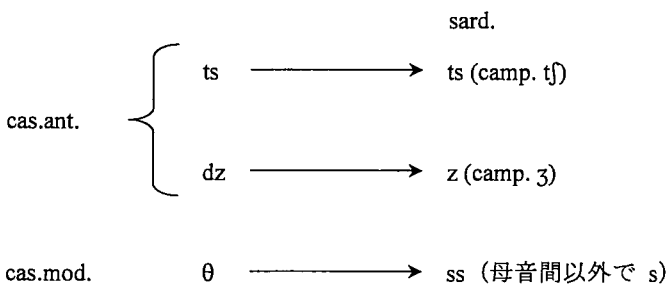
以上に示した Wagner (1922), (1984) の記述とその具体例から, 先行研究では cas.ant. [ts] はサルデーニャ語において [ss] で借入され, cas.mod. [θ] は [ts] で借入された, と考えられていることがわかる。しかしながら, 3. 1. 1, 3. 1. 2 の考察と比較してもわかるように, このような借入方法は本稿の主張とは異なるものである。一方, cas.ant. [dz] の借入方法については, Wagner (1922), (1984) の主張と 3. 2 で示した本稿のそれとの間に相違はない。ここで, Wagner (1922), (1984) の主張に従った子音の借入方法を図式化したものを示す。



Wagner (1922), (1984) の主張では、古カステイーリャ語の破擦音 [ts], [dz] がそれぞれ摩擦音 [ss], [z] で借入されることになり、この点ではこれらの子音の借入方法に並行性が見られる。しかしながら、Wagner (1922), (1984) の主張する借入方法は以下のような理由で容認できない。

camp. bussoni を例にとると、この語彙は cas.ant. buzón (<z> = [dz]) あるいは cas.mod. buzón (<z> = [θ]) のどちらかの借用形式であるが、Wagner (1922), (1984) の主張する借入方法ではこの借用形式は説明できない。その理由は、もし cas.ant. [ts] が [ss] で借入されるのであれば、古カステイーリャ語の形式において [ts] が含まれない buzón の借用形式において、[ss] が現れることはあり得ないからである (Wagner (1922), (1984) では、camp. bussoni と同類の語彙、すなわち子音変化 cas.ant. dz > cas.mod. θ が生じ、かつサルデーニャ語において [ss] で借入されている例は挙げられていない)。従って、camp. bussoni に含まれる [ss] は cas.ant. [ts] ではなく、cas.mod. [θ] を借入したものであるという推論が成り立つ。

以上のような考察から、本稿では cas.ant. [ts] はそのまま [ts] で、cas.mod. [θ] は [ss]([s]) でサルデーニャ語に借入されたと主張する<sup>7</sup>。本稿の考察によって得られた子音の借入方法は、以下のように図式化できる；



#### 4 まとめ

本稿では、カスティーリャ語内部で生じた子音変化, cas.ant. ts, dz > cas.mod. θ を判断基準として、サルデーニャ語におけるカスティーリャ語からの借用語の相対的年代を決定することができた。その結果は以下のものである。

(I), (II) に分類される語彙は、相対的により古い時代、すなわち子音変化 cas.ant. ts, dz > cas.mod. θ が生じる以前に借用された語彙である。

(III), (IV) に分類される語彙は、相対的により新しい時代、すなわち子音変化 cas.ant. ts, dz > cas.mod. θ が生じた後に借用された語彙である。

以上の結果は、cas.ant. [ts] が [ss] で借用され、cas.mod. [θ] が [ts] で借用されるという、Wagner (1922), (1984) の主張とは異なるものとなった。Wagner (1922), (1984) に対する批判の論拠は、例えば camp. bussoni のように、子音変化 cas.ant. dz > cas.mod. θ が生じた語彙の借用形式において、Wagner の主張する借入方法では現れるはずのない [ss] が現れている、というものであった。

サルデーニャ語におけるカスティーリャ語からの借用語の相対的年代を決定することによって、両言語間における接触の 1 つの側面を示すことができた。また、本稿における考察によって得られた、借用時期の相対的年代の決定が、スペイン王国の宗教的、政治的支配力、あるいは文化的影響がいかにしてサルデーニャ島に浸透していったかを理解する 1 つの手段となる可能性もある。今後は、このような可能性も含めて、サルデーニャ語とカスティーリャ語における接触の様相について、より広い観点から考察を加えていきたい。



## 註

\* 本稿は、日本ロマンス語学会第 43 回大会（2005 年 5 月 21 日 大阪女子短期大学）における口頭発表資料に加筆，修正を施したものである。

<sup>1</sup> 本稿では、島中央部から北部にかけて話されるログドローロ方言 (log.) と、サルデーニャ州都カリアリを中心とした島南部で話されるカンピダーノ方言 (camp.) を考察対象とする。

<sup>2</sup> 1469 年、それまでサルデーニャ島を統治していたアラゴン王国と、カスティール王国が合併してスペイン王国が誕生し、1478 年には全島がスペイン王国によって制圧された。以来、カスティール語が公用語となった。その後、サルデーニャ島は 1714 年までスペイン王国の支配下に置かれることになった (Wagner 1922: 221)。

<sup>3</sup> 17 世紀初頭に生じたと推定されている。詳細は Menéndez Pidal (1968: 112-113) 参照。

<sup>4</sup> 以下、サルデーニャ語の語形は音声表記で示す。また、借用の過程において語の意味が変化した場合、サルデーニャ語における意味を示す。

<sup>5</sup> カンピダーノ方言では、cas.ant. [ts] が口蓋音 [tʃ] で借入される現象が見られる； camp. tʃelebro (cf. log. tselembro) = cas.ant. ʧelebro (mod. cerebro)「脳」, camp. tʃerila (log. tsiriła) = cas.ant. ʧerilla (mod. cerilla)「細いろうそく」。口蓋音で借入されていることに注目すると、このような借入方法はトスカーナ方言の影響によるものと考えられることができる（トスカーナ方言は、13 世紀におけるピサ王国のサルデーニャ島侵入にともない、特にカンピダーノ方言に多大な影響を及ぼした (Virdis 1978: 46)。口蓋化はそのうちの 1 つである； lat. centu(m) > camp. tʃentu, log. kentu, tosc. tʃento.）。

<sup>6</sup> カンピダーノ方言では、cas.ant. [dz] が口蓋音 [ʒ] で借入される現象が見られる； camp. desluʒiri = cas.ant. desluzir (mod. deslucir)「姿を消す」, camp. tornavoʒ = cas.ant. tornavoz (mod. tornavoz)「教会内の、説教壇から声を響かせるための空間」。この借入方法も、トスカーナ方言による口蓋音の影響がかかわっていると推測できる。

<sup>7</sup> Alonso (1955: 289-290) では、1578 年に Juan López de Velasco という人物によって書かれた次のような文が引用されている；

“El sonido y voz que la ç con cedilla haze es el propio que le da su nombre, que se forma con la estremidad anterior de la lengua casi morbida de los dientes, no apretados sino de manera que pueda salir algún aliento y espíritu, como en lo alto del paladar se forma la s, de donde nace la dificultad que los estrangeros sienten en pronunciar la ç cedilla, diciendo siempre se por ce.”

このような記述も、cas.mod. [θ] が [ss] で借入されたことへの傍証となり得る。

## 参考文献

- Alonso, A. 1955. *De la pronunciación medieval a la moderna en español*. Madrid: Gredos.
- Blasco Ferrer, E. 1984. *Storia linguistica della Sardegna*. Tübingen: Max Niemeyer.
- . 1994. *Ello Ellos. Grammatica della lingua sarda*. Nuoro: Poliedoro Edizioni.
- Corda, F. 1994. *Grammatica moderna del sardo logudorese*. Cagliari: Edizioni della Torre.
- Corominas, J. / Pascual, J. A. 1980-1991. *Diccionario crítico etimológico castellano e hispánico*. Madrid: Gredos.
- Green, J. N. 1988. "Spanish" *The Romance Languages*. (Harris, M. / Vincent, N. eds.) 79-130. New York: Oxford U. P.
- Menéndez Pidal, R. 1968. *Manual de gramática histórica española*. Madrid: Espasa-Calpe.
- Penny, R. 2002. *A History of the Spanish Language*. Cambridge: Cambridge U. P.
- Virdis, M. 1978. *Fonetica del dialetto sardo campidanese*. Cagliari: Edizioni della Torre.
- Wagner, M. L. 1922. "Los elementos español y catalán en los dialectos sardos" *Revista de Filología Española* IX. 221-265. Madrid: Centro de Estudios Historicos.
- . 1960-1984. *Dizionario etimologico sardo*. Heidelberg: Carl Winter.
- . 1984. *Fonetica storica del sardo*. Cagliari: Gianni Trois.
- . 1997. *La lingua sarda*. Nuoro: Ilisso Edizioni.